

令和2年度農業技術対策指導指針

- I 水稻栽培技術対策
- II 麦類・大豆栽培技術対策
- III 野菜栽培技術対策
- IV 花き栽培技術対策
- V 果樹栽培技術対策
- VI 家畜飼養および草地飼料作物技術対策
- VII その他水田作技術対策

令和2年4月

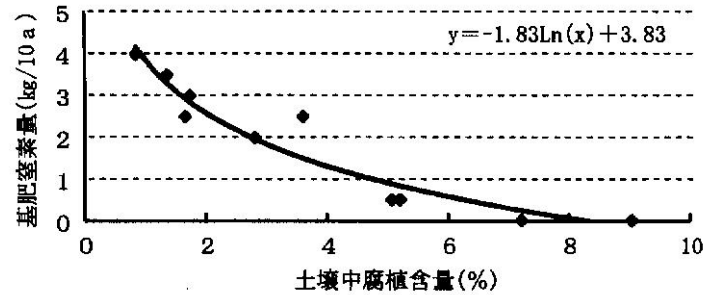
石川県農林水産部生産流通課
石川県農林総合研究センター

⑤ 基肥

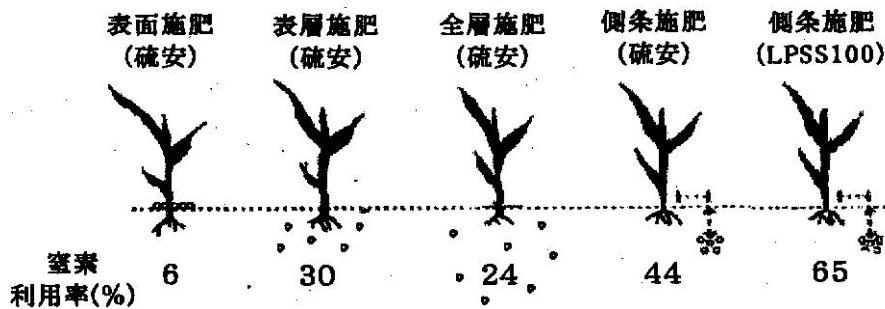
ア 窒素

湿田は土壤中の腐植含量が多いため、土壌からの可給態窒素の供給が多く、基肥量が少なく済み、乾田は施肥による基肥窒素の依存度が大きい。

稚苗移植において、基肥施肥法の違いから、稲体に利用される基肥窒素の利用率は下図のとおりで、側条施肥が最も利用率が高く、次いで表層施肥、全層施肥となり、土壌表面への施肥が最も低い。



第16図 良食味米生産のための基肥窒素量の判定 (石川農研)
(コシヒカリ)



第17図 稲体の基肥窒素利用率 (石川農研)

基肥 (活着肥含む) 施用基準 (稚苗移植 10a 当たり窒素成分 kg)

土壌タイプ	土性	早生種	中生種 (コシヒカリ)	晩生種 (ひやくまん穀)
乾田	粘質土	3~4	3	4
	壤・砂土	4	3~4	3~5
半湿田	粘質土	3	2~3	3~4
	壤・砂土	3	3	4

(注) 活着肥は 1 kg とする。

イ リン酸

リン酸は、基肥主体とし、10a 当たり成分で 6~9 kg を施用する。ただし、土壌分析により、土壌中の可給態リン酸が 20 mg/100 g を超える場合は、リン酸の施用量を減らす。

ウ カリウム

カリウムは、窒素と同様な吸収パターンをすることから基肥、穂肥とも窒

素と同様程度に施用する。

⑥ 穂肥

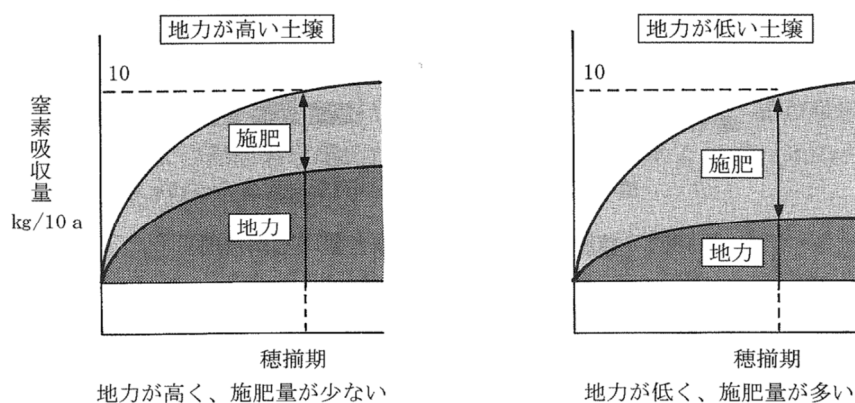
穂肥の施用時期の診断と施肥基準（施肥量：稚苗移植 10a 当たり窒素成分 kg）

	施用時期 (出穂前日数)	施肥量		生育診断		
		ゆめみづほ	能登ひかり	稲の姿	主稈、幼穂長	葉色
早生種	-23	2	—	上位葉直立	1～2mm	4.0
	-20	—	2	〃	2mm	4.0
	-10	2	—	〃	—	—
	-7	—	2	〃	—	—
中生種	施用時期 (出穂前日数)	施肥量		生育診断		
		コシヒカリ		稲の姿	主稈幼穂長	葉色
	-16～-15	2		上位葉直立	15mm	3.5前後
	-9～-7	2		〃	—	—
晩生種	施用時期 (出穂前日数)	施肥量		生育診断		
		ひやくまん穀		稲の姿	主稈幼穂長	葉色
	-20	3		上位葉直立	2mm	4.0
	-10	3		〃	—	—

- (注) 1 地力の高い地帯では、さらに穂肥総量で1～2kg減らす。
 2 LP穂肥一発肥料や有機入り肥料は、上記の窒素成分の基準内とする。
 3 有機100%肥料については、第1回目穂肥を、基準より5～7日前に施用する。

ア 地力に応じた穂肥施用量の決定

穂肥の施用に当たって、最も留意しなければならないことは、地力に応じた穂肥施用量を決定することである。一般的に地力と穂肥量との関係は下図のように考えられ、地力が高い程、穂肥窒素量を減らす必要がある。



地力と施肥量との関係

地力窒素の生育時期別の発現量は、土壌中の腐植含量や交換容量が大きい程、多くなる。穂肥施用時期以降の発現量は加賀地区の低地力地域と能登地区の高地力地域との差は10a当たりの窒素量に換算し、2～3kgとなる。